

宇和島市の識字学級

宇和島市

1 識字学級開設のいきさつ

宇和島の識字学級生は次のように語っている。

「識字学級は、文字の読み書きだけの学習などではありません。差別に立ち向かう生き方のすばらしさを学び、差別と闘いきるための勇気や元気を、身に付けていくための学習です。そして、学んだことを、奪い返した文字や言葉によって何らかの形で若い世代に伝えていこうとする場です」。



学級の様子（1990年代）

宇和島市教育委員会では、1980年代の終わりごろから、高齢者層を中心とした同和地区内の非識字者（文字の読み書きが十分にできない人たち）に対して、文字の読み書きの力を取り戻す場を提供したいと、識字学級開設に向けて地道な努力をしてきた。それは、「この問題から目をそむけての同和教育推進など、ありえない」という熱い思いがあったからである。あわせて「字が書けんということは、たとえいつになっても、けっしてだれにも言えるもんじゃない。あんたらにこの気持ちわかるかな」の厳しい「つきつけ」もあって、ついに、平成2（1990）年、宇和島市に、ひまわり学級・おもいで学級・たのしみ学級の三つの識字学級が開設されることになった。

2 宇和島市の識字学級の特色

宇和島市の識字学級の特色は、「学習の重点が『文字の読み書きの力を養うこと』のみではなく、『差別に立ち向かう勇気や元気を身に付けること』におかれていること」「学級に、定期的に保育園児や高校生が通って、学級生と一緒に机を並べて学習していること」である。特に、園児と学級生との交流を始めた意図は、「同和問題とのプラスの出会いを、子どもたちにさせたい」ということにあった。この交流は平成11（1999）年度から始まった。また平成12（2000）年度からは、宇和島東高等学校の生徒も参加するようになり、だんだんと交流の輪が広がって今は、津島高等学校、宇和島南中等教育学校、北宇和高等学校の生徒も参加している。

3 きらきら文字

識字学級は、文字の読み書きが中心であるが、あくまでも目的は「取り戻した文字や言葉によって部落差別に立ち向かう」ことにある。そして、厳しい差別の壁を打ち破り、闘った人々の輝かしい生きざまを学び続けることによって、差別に挑む勇気や元気を身に付けている。同時に支援者として関わっている市担当者は、差別に立ち向かい生き抜いてきたおばちゃんたちやおじちゃんたちの優しさやたくましさの中から様々なものを学びとっている。

しかし、高齢化のため、学級生が激減し、3学級あった識字学級は現在「たのしみ学級」のみになった。学級生のなかには、22年生が生まれるくらい長い歴史を刻んでおり、「識字学級には卒業はないんぜ」という合言葉のもと活動している。識字学級は、生きている証、人の命の輝きを発する場所である。そんな学級生が書く一文字、一文字を誰ともなく「きらきら文字」と呼ぶようになった。